

平成28年度第1回国頭村小学校交流学習
奥間小学校及び村内へき地5小学校（北国・佐手・奥・安田・安波）

【村の特性と主体性を発揮した村教委員会のカリキュラムマネジメント】

「特色ある学校づくり」、「開かれた学校づくり」、「学校の自主・自律性」など、次期学習指導要領改訂に向けて各学校の『カリキュラムマネジメント』が議論で取り上げられている。(H27.8 臨教審論点整理)

この議論の論点の対象を市町村教育委員会に置きかえると「地域の特色ある学校づくり」、「地域に開かれた学校づくり」、「市町村教育委員会の自主・自立性」となる。

国頭村は沖縄県内でも、少子高齢化、地域の過疎化が深刻な地域である。「小学校交流学習」は、まさに学校教育における地域課題克服に向けた市町村委員会の独自で独特の取り組みと言える。

交流学習実施要項には以下のように目的が示されている。

《目的》

- (1) 各学年の発達段階に応じ、他校との交流を通して自己を見つめ、協調性・適応性や意欲の向上を図り、地域のへき地性を克服し児童の社会性の育成に期する。
- (2) 交流学習を通して児童の生活経験及び学習経験を豊かにし、ものの見方や考え方を拡充させる。
- (3) よい思い出をつくらせ、友情の目を育てる。
- (4) 他校の児童の中で集団行動から自己を見つめる。
- (5) 教師の研修交流を深めて、学習指導及び授業改善に役立てる。



さて、上記の目的は達成されたであろうか？交流学習の事業が始まっておよそ20年になる。平成25年度からは、奥間小学校と辺土名小学校で年1回ずつ実施される、結果へき地の子ども達とへき地の先生方は年2回の交流学習と研修となる。受け入れ校の2校にも様々な準備や調整に負担をお願いすることとなるが、



快く受け入れてくれる校長先生と職員に感謝である。そして何よりも村教育委員会で主催し、職員の旅費や教材費等を負担し、村内すべての子ども達の「学びの保障」と教師の専門性の向上に熱意を傾けられていることに敬意を表したい。この交流学習で教師たちの授業の質が高まり、子ども達の資質を高め、さらに教師の専門性と授業力の向上がなされていることは、「教師が子どもから学び」、「教師が同僚から学び」両者の人間性を高める『互いの成長の授業』として価値ある交流学習事業ではないかと考える。

[1年生国語：みんなの はっぴょうを たのしく ききあいましょう。] 授業者：T・T先生

今年4月に安田小に赴任された。村の教育委員会から理念が下ろされ「一人残らずすべての子どもの学びの保障」に向かう。へき地校も初めて、「協同学習って?」「学びの共同体って?」…不安と戸惑いに焦る授業者の日常が目につく。職員の数も校長と2名の担任で、校務分掌も半端ではない信じがたい日常が繰り返される。村内へき地5校の先生方がまず直面する現実がある。しかし、どんなへき地にあっても憲法の「学習権の保障」がある。納得してからとか、ゆっくり考える余裕などない、目の前の子ども達の成長を約束してあげなければならない。本日が初めての交流学習



であるが、しっかり1時間の授業を受け持ち授業者も参画した。事前の宿題も各学校の先生方がしっかり準備した。「はなしかた」、「ききかた」に気をつけて、3~4名グループで向かい合う。右写真、自分で書いた文字が読めなくなった子を支え合う1年生。素敵な風景ですね。

授業者の日常が目につく。職員の数も校長と2名の担任で、校務分掌も半端ではない信じがたい日常が繰り返される。村内へき地5校の先生方がまず直面する現実がある。しかし、どんなへき地にあっても憲法の「学習権の保障」がある。納得してからとか、ゆっくり考える余裕などない、目の前の子ども達の成長を約束してあげなければならない。本日が初めての交流学習であるが、しっかり1時間の授業を受け持ち授業者も参画した。事前の宿題も各学校の先生方がしっかり準備した。「はなしかた」、「ききかた」に気をつけて、3~4名グループで向かい合う。右写真、自分で書いた文字が読めなくなった子を支え合う1年生。素敵な風景ですね。

[2年算数：どんな しきになりますか みんなでかんがえよう。] 授業者：N・R先生

へき地校の日常では協同学習やペア学習に限界がある。人数の問題上教室では学び合いの成立は難しい。

だからこそ、この交流学習で挑戦する価値があります。

左写真、この字の中央の間をつかって、題意を確認する授業者。右写真、他校の子であっても仲間になつぐためにケアに入る。まじめで一生懸命な教師ほど、丁寧に「分かるまで」になってしまう。準備された3つ目の問題（ジャンプ課題）まで進めることができなかった。

この授業者には必ず得たものがあった。なぜならば、教師自身が「アクティブ」に向かっていったからである。無理せず、焦らず、ゆっくり確実に向かいましょ。



- i 習得・活用・探究という**学習プロセス**の中で、問題発見・解決を念頭においた**深い学びの過程**が実現できているか。
- ii **他者との協働（協同）**や外界との相互的作用を通じて、**自らの考えを深める、対話的な学びの過程**が実現できているか。
- iii 子ども達が見通しを思って**粘り強く取り組み**、自らの学習活動をふり返って次につなげる。**主体的な学びの過程**が実現できているか。



[3年] 授業者：A・Y先生（算数） O・S先生（生活）



へき地校から参加の先生方の授業を紹介します。左写真、佐手小のS先生、生活科の学習活動「つくろう あそぼう くふうしよう」。教室の仲間と創作活動を楽しむ。この作品が完成に至る学習過程で対話的なコミュニケーションによる、「学び」が成立していたかがプロセスの中の学びである。さらに、「わからないコトやモノ」については他者に依存しながら互いにきき合い、支え合いながら協働的に解決に向かい、他者の発言や行為から「個の学び」に新たな深まりや広がりがあったか。

楽しみながら、あきらめずに完成に向かう主体的な学びと粘り強さが感じられたかが大切となってくる。アクティブを行為や眼に見える活動的視点からだけではなく、しっかり考えながら行為される脳のアクティブがさらに重要になる。

右写真、「繰り下がりのある ひき算」。共有の課題がグループに下ろされ意図的にグループによる解決の過程を仕組む授業者。下の写真、手前の3名は距離が短くつながりやすいが、奥の女の子が孤立してしまった、できれば机を動かしてグループを編成させたかった。「一人残らず」にこだわるのが国頭の教師たちの理念である。上に記された田村先生の「アクティブラーニングのイメージ」で校内研修授業や、自己の日常の授業をふり返ってみてください。国頭の教師のすべてが挑戦者です。



[4年算数 授業者：Y・R先生「割り算のひっ算。虫食い算」]



写真①

今年度初めての初任者のクラス、写真①、担任の先生からの紹介を受けさっそく授業に挑む。割り算のひっ算の虫食い算を準備した授業者、交流学习では、教科や単元、学習内容の調整にも気を遣う。授業者は、基本的な問題を簡単に扱い、最初の問題をグループにして下した（写真②）。ほとんどの子が「まずは自分でやってみよう」としばらく個人で解決に向かう。しばらくすると「できた者」は確かめるために聞き合い、「分からない者」達は「分かってほしい」ために仲間に依存して訊き合う（写真③）。写真④、多様な考えを共有する。丁寧で優しい教師に時間が迫る・・・苦しい状況になる。



写真②



写真③



写真④

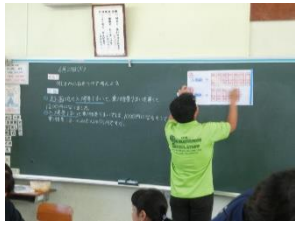
[4年国語 授業者：H・S先生] 「できない」を分かってあげる。困り感に寄り添う。ケアする。

授業のユニバーサルデザイン化、インクルーシブ教育、いったい誰のために何の目的で提案されてきたのだろう。さらにその提案の社会的背景は・・・。大阪市の大空小学校の木村泰子校長は不登校ゼロ、すべての子が共に学び合う学校として「みんなの学校」奇跡の小学校としてドキュメンタリー映画を世に送り出した。木村先生は弱い子ども達も含めた、すべての子ども達に向かう教師の姿勢として『一番大切なこと。それは、子どもの声を聴く』ということだと念を押す。



アメリカにおいて奇跡の学校改革を成し遂げたデボラ・マイヤー（女性校長）も著書の中で「私は何も教えることはない、教師の仕事はすべてにおいて子どもの声を聴くことです。」と明言する。左写真のS先生のケアの姿が全くその理念だと思えます。

[5年算数 同じものに目をつけて考えよう 授業者：H・S先生]



まず、モノの準備がいい。資料がわかりやすく、さらに子ども達にもチケットを配り問題のイメージ化を図る。言葉や文字だけで題意を理解できない子にとって、図や具体物を提供するのはユニバーサルビジュアル化による支援と考える。さてここからが授業者のデザインとスキルによる挑戦である。「どのタイミングで、どのような形で、どのレベルの問題をグループへ下ろすか？」 下の2枚の写真を見比べたい、左が問題は分かったがまったく「学び合い」が発せれない状況の時である。



[教師からの言葉] 例

- みんなで協力してやってみて
- わかなければ友達にきいてね
- 困っている友達は助けてあげてね

右写真、授業者のケアの後、グループ員が向き合ってきてきき合っているところである。

[5年国語：漢文に親しむ 授業者：M・M先生]

めあて：漢字や言葉を手がかりに文章の意味を考えよう。

5年の学習で初めて漢文との出会いがあった。本日は発展的な扱いで孔子の『論語』から教材をチョイスした。学び合いが成立する条件としてまずは、教材の工夫と教師の「問い」の準備が上げられる。「何とかして解決したい」等の子ども達の解決意欲を喚起する教材の準備や提供を考えていきたい。さらに問題のレベルが簡単に解決できない「難しい課題・テーマ・問題」でなければ互いに訊き合う学び合いの発生は難しくなる。簡単だと



自分一人でさっさと片づけてしまい。他者への依存や他者の力の必要性を感じなくなる。

本日の「子曰く…」はどうであったらう。交流学习で他校の児童が混ざっている無作為なグループ編成である。授業者は意図的にグループに1枚のシートで向かい合うきっかけをつくる。

[教室経営・授業づくりの基本] ~聴き合う関係づくり~

この教室の子ども達が圧倒的に優れているところがあるそれは、「きき合う」関係づくりが成立していることである。教師や仲間に向けられる眼差しが素晴らしい



[6年社会：国頭村の歴史探検 授業者：赤嶺信哉（国頭村学芸員）]



6年の社会科は、教育委員会の学芸員の先生を講師として招いての授業である。教科書の歴史時代に私たちの地域はどうだったんだろう学習課題が自分たちの生活や社会とつながりのある内容は子ども達の学習意欲を喚起する。村内の歴史を知るための様々な道具や遺跡を手がかりに子ども達の探究が進む。

「温故知新」という言葉がある。今日の授業から彼らが未来に向けて学んだことは

はなんだったんだろう。「学び」には各教科に応じた真正の学び（オーセンティックな学び）がある。子ども達にとって「歴史を学ぶ」とはどういう意義があるのだろうか。少なくとも覚えなければならないことだけを教えられることは「学んだこと」にならない。歴史的なヒト・モノ・コトから彼らの未来を切り開くみちを案内する「学び人」が育つことを願ってならない。

[授業リフレクション]

本日5校時まで交流学习を実施した後、低・中・高学年の3つの部会に分かれて授業リフレクション（研究協議）が行われた。これも素晴らしい試みである。児童は教育委員会がバスを手配し各学校まで移送してくれた。

先生方は15:30~14:45まで本日の授業の振り返りと、日常授業の情報を交換した。左写真は、低学年部会の様子、授業の写真とビデオを視聴し、様々な工夫やアイデア、他者の授業からの気づき、思いや不安、疑念を共有し各々の研修価値を高めていく。すべての授業提供者に感謝である。

国頭学びの会ゆい

